



EXODUS

櫻井水都

-chapter 1-

そんなこと言われても、というのが、この時の俺のごくごく率直な感想だった。

他に何を思えというんだろう。こんな言葉を投げかけられた瞬間に。分かる人がいたらぜひ教えてもらいたい。それぐらい、香さんの今の台詞は困った代物だったのだ。

カーテンを通り抜けて射し込んでくる朝日に、俺は目を細めた。香さんの表情を窺おうと思ったけど、逆光になってしまってよく分からない。だから先刻の台詞の意図も、確かめようがなかった。

一人で暮らすにはそう不自由しない感じのワンルームに、二人。テーブルに置かれたままのカクテルバーの空き瓶が、俺の記憶を裏付けした。そうだ、そうなんだ……。

「雅貴、あんたってさあ、つくづく嫌になるほど好青年だよな」——これが、今日のこの朝を分け合って身なりを整えた途端に、香さんが俺に言った言葉だった。

おそらく俺が思うほど、この言葉には深い意味など込められていないんだと思う。彼女はそういう人だ。だから俺も何てことない一言で軽く流せば良かったんだろう。でもその一言が出て来なかった、どうしても。俺は頷くしかなかった。何ひとつ揺らいだところのないような笑みをつくって。こんな俺の表情は香さんにはくっきり見えるだろう。でも俺からは、香さんの表情は分からない。かなりアンフェアな位置関係だと思う。

こういう言い方は難だけど、今回は香さんのほうから言い出してきたのだ。ちなみに「前回」はないんだけど……だから、もう少しぐらい俺のほうに分があってもおかしくない筈だった。それをひっくり返しているのは、ここが香さんの下宿であるという事実だけじゃないんだろう。

あの言葉は、前触れもなく高校時代を思い出させた。温室の中で籠の鳥に甘んじていた、俺の高校時代。二年経つか経たないかの筈なのに、やけに遠く感じる。

朝日が目に直撃するこの場所から少し動くと、今までよく分からなかった部屋の景色が映った。昨日の夜は気づかなかった。うずたかく物が積まれた机に、ちらっと見えるキーボード。

「何じろじろ見てんのよ。あたしが無精だったの、知ってるでしょ、始めっから」

「いや、そういうんじゃないで……」

言うと、香さんは俺の視線を追って、それからふっと気づいたようだった。上に乗っかっているノートやらCDやらを崩さないように、実に器用にそのキーボードを取り出してきた。

「いいよ、ほら」

「え？」

「だって弾きたそうじゃん。違う？」

そう言いながら、彼女は電源を入れてキーをいくつかでたらめに叩き始めた。わーやだまだ動くんじゃない、働き者一、などと呟いている。……今までどういう扱いされてきたんだろう、これ。

「うん、じゃあお言葉に甘えて」

俺が弾こうとする横から、香さんは厳かに告げて下さった。

「ボリューム下げてね。ヘッドホンなんてないから、それ」

頷いて、俺は指慣らしを始めた。これだ、このキーを指で押さえる感触。ずいぶん久し振りだから、鈍ってるかもしれないけど。

シンセ、などという豪華な代物じゃなかった、それは。キーボードに必要な最低限の機能しかついていない感じだ。それでも気分は充分出る。しばらくキーの上で指をさまよわせる。何を弾

こうか……。

やがて、俺の指は一つの指向性を持って動き出した。

頭の中で怒鳴り回る非常ベルに
せき立てられるように走り続ける
暗闇の中ぼうっと光る緑のランプ
そう目的地は解りきっている筈なのに

「……へえ、何か意外だね。そういうロックっぽい弾くんだ」

香さんが呟いたので、俺は伴奏と歌を中断し、それで今まで自分が歌っていたことによりやく気づいた。

「何でやめるのよ、別に変だとは言っていないじゃん」

「僕もそんなことは思っていないけど……弾かないよ、普段は」

本当だった。下宿代わりに住まわせてもらっている叔父さんのうちにはピアノがあるんだけど、それに向かう時にはいつもクラシックだ。何せ五歳の頃から十年間習っていたのは徹底したクラシックピアノだったから。

「だろうね。あんたクラシックですって雰囲気だもんねー。バッハとかモーツァルトとか、そんな感じ？」

そう見えるのか。でもどっちかと言えば、一番好きなのはバッハとかモーツァルトよりドビュッシーなんだけど……ぽんと手を打って、香さんが言葉を継いだ。

「でもじゃあ、何で覚えたの？ って言うか、聴いたことないんだけど。オリジナル？」

「僕が作ったんじゃないけどね。高校の時ちょっと助っ人頼まれて、それで弾いたんだ」

「助っ人？ バンドか何かの？」

「そう。文化祭の有志バンドだったかな、あれは」

「……度胸あるねー。あんたのガッコ、これでもかってぐらいの名門私立なんじゃなかった、確か？ いやー、反骨精神旺盛な若者はおねーさん、好きだよー」

何やらしきりに感心している。わ、若者って……それじゃあまるで今のアナタは年寄りみたいじゃないですか香さん。

不意に、ワイシャツの裾が軽く引っ張られた。振り向くと、目の前に香さんの勝ち気そうに整った顔があった。心の準備をする間もなかった……柔らかい感触の唇が俺のそれをふさぎ、そして一瞬で離れた。鳩に豆鉄砲、というのは、きっと今の俺の表情のことなんだろうとぼんやり思う。

「定石でしょ、一応」

実にあっさりと、彼女はそうのたまった。――脱帽です。

-chapter 2-

籠の外に広い世界があると知らされた籠の鳥は幸せを感じるだろうか。

俺は思う。何もあの頃だけが籠の鳥だった訳じゃない。ずっと、おそらく生まれてきた時から。自分が籠の鳥だと気づいてしまったから、俺の高校時代はモノトーンで彩られている……。

これでもかってぐらいの名門私立——俺の母校である翔斉高校は、県内で一、二を争うぐらい確かに偏差値は高かったけれど、内情はそれほど平穏じゃなかった。

先生はごく一部の変わり種を除けばだいたい杓子定規極まりないか、あるいは無関心なタイプに二分できた。生徒は生徒で、絵に描いたような真面目型もいたけれど、公然と校則違反を犯す類いも割といた。何せ、なまじ「出来る」ものだから、生徒がその気になって理論武装すれば、先生にも歯が立たない。それでも表向きは確かに名門私立。これが、俺の母校だ。そして、そんな中で俺は特別真面目でも不真面目でもない、いわゆる「無難な」生徒だったと思う。

それでも、別にことさらつまらなかったとは思わない。思い出もそれなりにある。人間は、どこまでも現状に満足することができるのだから。

「孤立を恐れない勇気より争わない勇気」——いつからだろう、この言葉を俺は誰に教えられるでもなく座右の銘にしていた。

旗色を明らかにしない。俺が正しいと思ったことの、アンチテーゼを唱える人は必ずいて、そのどちらかが間違っているなんて審判を下す権利など俺にはない。それは傲慢だし、第一、必ず周りを傷つける。

争わずにすむ方法を、俺は結構苦勞して身につけたつもりだ。本当は苦勞せず、誰を傷つけることもせずに身につけられたならそれが一番なんだろうけど、残念なことに叶わなかった。

あともうひとつ。自分の置かれた環境に疑問を抱いてはいけない。自分は何でここにいるのかとか、何でこんなことをしているのかとか……そういうことはできる限り考えないようにする。自分の意向を押し出せば衝突するから。俺はそういう風にしてきた。もうずっと前から。

おそらくは物心ついた頃から。

その頃俺は弓道部を退部したばかりだった。

些細と言えば些細なきっかけだった。小学生の頃から習い続けてきて、中学、高校と当たり前のように所属してきたけど、この度やめることになって、思ったほどの未練はなかった。それで俺はああ、と思ったものだ。何が何でも大好きだという訳じゃなかったらしいと。ただ、高校生活の残る二年間を、このまま体も動かさずに過ごすのは少し手持ち無沙汰だなとは思った。

だから何でも良かったのだ。心地よく汗のかけそうな所ならどこでも。それを考えると別に必ずしも学校のサークルである必要もなかったんだろう。きっかけは、特別多くも少なくもない俺の友達のうちの一人の誘いだった。

「相沢、お前今フリーなんだよな？」

俺が頷くと、彼——宇野は何やら嬉しそうに手を叩いて、机に身を乗り出した。

「よし決まった。悪いことは言わん、騙されたと思ってすみやかにわがワンゲル部に入りなさい」

「え、何で？」

何気なく訊くと、宇野は少し動揺したようだった。何か魂胆があるに違いない。……そういえば、今年は新入生の入りが潰滅的に悪かったとか何とか。

「宇野、確かこの間部員が足りないって言ってたよな」

「ふ……ふっふっふっふっ……ばれちゃあ仕方ない、いや実にその通り。部として存続できるかどうかさえ危うい状態にあるから、君を名前だけでも引きずり込もうとしてるのだよ相沢君」

ス、ストレートな……。身も蓋もないというか何というか。

「何つっても、オゼゼの問題は切実でしょ。ワングルって結構金かかるのよー。今年先輩がみんな引退して、同好会扱いになんかなったら、予算もらえないでしょうが」

「……お前、それさ、僕が生徒会会計だって知ってて言ってる？」

「うん、勿論！」

両手を合わせて神様お願いポーズなどしている。客観的に見てかなりおかしいんだけど、笑ってやるのは何となく悔しいから溜息をつくにとどめた。すると真剣そのもの、という眼差しと口調で、宇野は俺に言いつのる。

「……相沢、今度昼飯おごってやろう。どうだ？」

「いらないよ、そんなの。……分かった。入ろう」

特に考えるでもなく、ごく自然に出てきた言葉だった。自分がそんなに弓道に入れ込んでいた訳じゃないことを知ってしまったから。体を動かせるならどこでも良かったし、それが友達を助けることになるのならそれもいい、と思った。

「さんきゅー、だから相沢君て好きさー」

いつも通りのおちゃらけた宇野の物言いを聞きながら、俺は口の中で言葉を転がしていた。

(ワングル、か……)

当然のことだが、ワングル部は山に登る。頭の痛くなるようなことが起こるだろうな、と思った。そしてそれは実現した。

「まあ、雅貴さん！ 山登りなんて危険じゃないの！」

というのに始まって、俺は一通りお母さんの説教を聞く羽目になった。

とは言っても、お母さんの言い分はかなり感情論に走っているのだから、論破することができない訳じゃなかった。でもそこまでする気もないから、いつも俺は黙って聞くことにしている。そして聞き終わった後、こう言うのだ。今回も例に漏れることはない。少し間を置いてから、口を開いた。いつもと同じ調子で。

「大丈夫ですよ、そんな不注意はしませんてば。無茶なプランも立てない。その辺りもちゃんと分かってます。信用できませんか」

そうすればお母さんは必ず折れる。今回も例外ではなく、溜息混じりではあるけれど頷いてくれた。

「……そうね、雅貴さんはしっかりしてるものね。私達の期待を裏切ったことも、一回だってなかったわね…

…」

この言葉を引き出せば俺の勝ちだった。裏切ったことはない。それが、俺の信頼――。

時々、痛いけれど。息が苦しく感じることもあるけれど。

そんなものは気のせいだと思った。俺は両親をがっかりさせないように努力しているだけ。その度に期待はどんどん重くなってゆくけれど、「這えば立て、立てば歩きの親心」というのは俺

にもよく分かる。

不服など、何もないのだ。そう何ひとつ。

けれど、この時から、俺の中の何かが確実に変わり始めていた。

文化祭があった。

翔斉高校に入って二度目の文化祭だ。この時期、翔斉の生徒の何割かは被り飽きたエリートの仮面をかなぐり捨てて、ここぞとばかりにパワーを全開にする。この「名門私立」にもやっぱりロックフリークは存在した。そして、それを演る有志バンドも。

俺は生徒会の人間だったから、他のみんなとは少し違う意味で何かと忙しかった。忙しいのは望むところだった。忙しさにかまけてこの文化祭を乗り切ろう。それだけで一応の充実感はある。

でもちょっとした事故が、俺の心積りをあっさり崩した。

「相ちゃん、助っ人頼まれてくんない？」

有志バンドのひとつの、キーボーディストが練習中に音楽室のピアノで怪我したんだという。そのボーカルがたまたま俺の友達で、俺に泣きついてきたのだった。「泣きつく」という表現があながち比喩ばかりではないような雰囲気だ。

「僕でできることならするけど……ロックキーボードの経験なんて全然ないよ？」

「分かってる」

「こういう言い方も何だけど、他に心当たりないのか？」

「ないんだ……って言うか、いることはいるんだけどな。下げたくないんだよ、レベルを。……あいつ、むちゃくちゃ上手いから」

お前なら基礎は申し分ないだろ、と、遠山は言うのだった。

事情はよく分かった。でも、だからこそ俺でいいんだろうかと思ってしまう。人が思うよりピアノとキーボードはわりと別物だ。コードとか転回形とか……分からない訳じゃないけどどうも馴染めない。とりあえず大方のところは初見で理解できるとは思うけど。

(レベルを下げたくないんだ)

(あいつ、むちゃくちゃ上手いから)

真剣なんだ、と思った。こいつのこういう所はすごいと思う。好きなことに純粹に向かうのが、じゃなくて、好きなことだから、趣味だからこそシビアにクオリティを目指すのが。それが義務でも何でもなく、数ある中から確実に自分で選んだものだから。

俺は目を細めた。乗っかれればいいと思った。束の間の幻でも構わない。彼の後について行けば、俺なんかじゃ及びもつかない場所を垣間見ることができるかもしれない。

「……いいよ。やってみる」

「本当か!? サンキュー、すげえ助かるよ！」

そう言った時の遠山の表情が、何だか妙に印象的だった。

それから俺は練習した。家でやったらお父さんやお母さんに何か言われて言い訳しなきゃいけないんだろうなと思うと結構気が重かったので、学校でやった。尾崎豊あり、ビートルズあり。あとさらに何種類かの、実はよく分からない曲のコピー。その中にたった一曲だけ、オリジナルが混じっていた。

事務処理と練習に追われて、当日はあっという間にやってきた。気がつくと、俺はステージの

上だった。思ったよりたくさん人が来ていた。人垣の前のほうには佐世子さんと武藤も――。

『エクソダス』

遠山が、自分で作った曲のタイトルを紹介した。テンポは二百近い、さすがにキーボード・パートのかなり難しい曲。

ドラマーがスティックを打ち鳴らした。それが合図だった。

どん、というか、ずしゃっ、というか、そういう類の圧力を持って、それは襲ってきた。

その時点で既に、俺は何だかもうよく分からなくなっていた。ただ引きずられるままに。音の洪水によって引っ張り出された俺の中の嵐に引きずられるように弾き飛ばす。振り落とされないようにするのが精一杯だった。

歓声。シャウト。歪んだギター。混ざり合ってそれは熱波になる。そうか。遠山はいつもこういう風に。

どんなに腕を伸ばしても　どんなに息を切らしても
辿り着かないあの非常口

When is the EXODUS?
(嘘臭い真実はもう要らない)
When is the EXODUS?
(生温い現実には飽き飽きさ)

一瞬の間。ここでグリッサンド。鍵盤の右端から左端まで一気に。
遠山のブレスの音。火傷しそうに熱い塊が流れ出す前兆。

この閉ざされた箱庭から飛び出す術を
見つけるんだ
きっと

ステージが終わって裏に引いてから、遠山と目が合った。

「レベル下げちゃっただろ。済まない」

俺が言うと、彼は痛いぐらい思い切り背中を叩いてくれた。そのままの姿勢でただ一言。

「どこが？」

忘れることができない。初めて登った山の空気とその解放感。ステージの上で感じたあの熱波。もう手遅れだった。もう知ってしまったから。自分が不自由だということを自覚していない状態をこそ自由と呼ぶのだから。俺は不自由だ。はっきりとそう思った。

俺は東京に出ることに決めた。それを両親に納得させるために、全国随一と言われている東都大学を受けた。

――そして、無事合格した。

-chapter 3-

講義室でまだ来ない教授を待っていると、何とも名状し難い笑いを浮かべて学科の知り合いが肩を叩いてきた。

「相沢、どうなんだ、あの噂？」

「どんな噂？」

俺が首を傾げると、そのままの表情で、身を乗り出して彼はこんなことを言った。

「野添香さん宅でやらかした痛恨の一発、っての」

—俺は、とっさに、適当な言葉が見つからなかった。

気がついたら知り合い中の評判になっていたのだ。しかも、俺の与かり知らない所で交わされるうちに、話に尾ひれがついて、割ととんでもない内容にまで発展してしまっていた。だから俺は、俺のモラルと香さんの立場のために、この噂を片っ端から否定—あるいは訂正—して回らなくてはいけなくなった。

「で、子供はどうやって養うつもりな訳？ 二人とも学生じゃ辛いでしょ」

「あり得ないよ、それは」

「何で」

「.....だから、事実無根なんだよ。自分の身分はよく分かってるつもりだし、責任取れないことはしたくないから」

ありのままを俺が言うと、彼は興ざめしたような溜息をついたものだ。

「何だ、つまんねえの」

つまる、つまらないの問題じゃないと思うんだけど.....。

でも、この件でどうしても腑に落ちない、そして一番知っておきたいことは別にあった。つまり、誰がその噂の発信源なのか、ということだ。こんな噂を流されて、より傷つくのはたいてい女性のほうだし、だからなるべく人に見られないように気は配ったつもりだ。それに、たとえ誰かがたまたま目撃してしまったにしても、それをこんな風に言いふらすのはあまり望ましいこととは思えない。

俺がそれを訊くと、その知り合いはしばらく考えて、歯切れ悪そうに答えてくれた。

「いや.....なんせ俺も又聞きだから、よくは分かんないんだけどさ。誰かが言ってたぞ、野添本人が話してたって」

それはいくら何でも、と思った。そんなことを言いふらして、香さんに何のメリットがあるというんだろう。

だけど、とりあえず、香さんと話をする必要はありそうだった。

「そうだよ。あたしだよ、喋ったのは」

表情ひとつ変えないで、香さんはあっさりと言った。

表情が変わったのは俺のほうだった。彼女が嘘をついているようには思えない。だから本当なんだろう。でもどういう経緯で。鎌でもかけられてついうっかり喋ってしまったんだろうか。

「自発的に。あたしこないだ雅貴と寝たよ一、って。嘘じゃないでしょ。んで、最近ちょっと吐き気するんだよね、ともさ。これも事実だよ。あたしここんとこ体調悪いんだ」

やけっぱち、としか思えない口調で、香さんは続ける。.....やけっぱち？ どうしてなんだ

ろう。

「……何で、そんなことを？」

「さあ。分かんない。何となく言いたくなっちゃったのよ。非常識だって、怒るなら怒んなよ」
(分らない……)

何となく、でこんな最大級のプライベートを喋ってしまうほど香さんは考え無しじゃない筈だ。でも喋ってしまったのなら、それなりの理由がある筈で……どうして、こんな風に捨て鉢になっているんだろう。それに、怒られることを望んでいるような。俺にとって、怒る動機になるといえば確かになるだろうけど。

「……怒りは、しないよ。まあ割と困ったことにはなってるけどね。香さんは嘘は言ってないんだろう？ でも噂の間違ってる部分については訂正しといたから、一応」

香さんの表情は依然変わってなくて、彼女がどういうつもりなのか判断する術はなかった。あの日の朝のように、逆光になんかなってなくて顔がはっきり見えても、やっぱり彼女の意図は分からない。

「本当は揉み消せば、それが君の立場のためにも一番良かったんだろうけど。しらを切ってはみたんだけど、切り通せなくて」

「……ふうん」

香さんは頷いて、一拍置いて、つけ加えた。

「雅貴くんは、優しいね」

それは何て返せばいいのか分からないんだけど……。

分からなくて、黙っている俺の顔を覗き込んで、香さんは謎の言葉を口にした。

「そうだ、あんたに伝言。人の従姉に余計なちょっかい出すな、って」

「……ごめん、分からない。誰から？」

「武藤昭道」

—絶句、するしかなかった。そんな俺にカオリさんはさらに追い打ちをかけて下さった。

「あたしの従弟」

武藤昭道、という人物は俺の中、高校時代の同級生で、高一まではサークルメイトでもあるけれど言ってしまうとあまり反りの合うほうではない相手だった。とは言っても、別に嫌いとかいうのではなくて、では好きなのかというとそれも少し違っていた。たまたま反りが合わなかっただけで、何も武藤の性格や考え方を否定しようという気はない。そこら辺になってしまうと俺の入り込めるテリトリーじゃないんだろうから。

でもとりあえず、彼は過去の人だ。正確に言えば、過去の人だ。筈、なのだ。筈、というのは俺が現役の二年で、今がちょうど冬休み直後だからで……つまり、成人式の後待ち構えるクラス会で、否応なく顔を合わせてしまうからだった。

ちなみに成人式に出席するには長野の実家まではるばる帰省する必要があるって、これは避けられない。何やかやと正月も帰ってないので、成人式ぐらいは帰ってこいという両親の言いつけに逆らうことができなかった。

まあ……つまり。

割と厄介なことになるかもなあ、というのが、俺の今の偽らざる気持ちなのだった……。

長野の一月はやっぱり寒い。

日本の屋根のふもとにして、俺の住んでた辺りは地図にも載っているちょっとした盆地。駒ヶ岳が近くにあり、ちなみにこのすぐ側をフォッサマグナが走っている。……まあ最後のはかなり関係ないけれど、寒いことは確かだった。

改札を出て、辺りを見回す。懐かしい駅だ。所々新しくはなっているみたいだけど。遊ぶのもちょっと遠出するのも、たいていここで待ち合わせたものだけ。この辺りの色々な線が乗り上げていて割と便利のいいターミナル駅。絶好のスポットが揃っているくせに何故か弱小だった翔斉のワンゲル部で合宿に行く時も、ここが集合場所だった。

(帰ってきたんだ)

(ここへ)

息苦しさや隣合わせの、でも確かに満たされてはいた日々が繰り広げられた場所へ。

迎えが来てくれるという話なので、俺はもう一度辺りを見渡した。すると人波の中に見慣れた、けれどももう一年ぐらい見ていない人物の影を発見した。あれ、でも。

(清貴一人だけ?)

「お、いたいた。兄貴ー！」

向こうもこっちに気づいたみたいで、高く手を挙げて大声で呼びかけたりしてくれる。人込みで注目されるとか、そういうことにあまり頓着しない奴だからなあ……。

俺も頷き返して—届いたかどうかは分からないけど—早足で歩いていく。約一年振りに間近で見る弟は、俺と同じぐらいまで背が伸びていて、いくらか日焼けもしていた。高校二年の弟。サッカー部でポジションはフォワードだと、この間電話で言ってたっけ。

久しぶり、と俺が言うのより一瞬早く、清貴が口を開いた。

「お帰り、兄貴」

「……ただいま」

お帰り、と言われて久しぶり、とは答えられない。清貴の一言はさりげなく俺をこの風景の中に馴染ませてくれたようだった。

—帰ってきたんだ。良いにしろ悪いにしろ、ここへ。

お父さんは仕事で留守、お母さんは風邪気味で出られないのだという。もっとも、お母さんは風邪を押しても俺を迎えに来ようとしたらしいけど、清貴が止めたんだそうだ。正しい判断だと思う。

「じゃあ、お母さんも相変わらずなんだ？」

苦笑しつつ、俺が言うと、清貴は妙にしみじみと頷いた。

「そうだな、って言うか、悪化してるぞ、あれは。なかなか兄貴に会えないもんだから、こういう時になると結構常軌を逸しちゃってるし。まめに帰ってきてやれよ」

「前向きに善処するよ」

「……そのさあ、へっぽこな政治家か役人みたいな台詞、やめようぜ？」

やっぱり兄貴の将来は官僚で決まりだな、うん、なんて勝手に納得している。それは褒められるとは思えないので、清貴の頭を軽くはたいてやることにした。

この感覚だ、この遠慮会釈なく軽口を叩く感覚。迎えに来てくれたのが清貴一人で良かった、と思った。お父さんやお母さんが来てたらそれなりに疲れてしまうだろうから。……不謹慎なことを考えてしまった。

「ところで、兄貴、あれからキーボードやってないの？」

不意に清貴が、話題を変えてきた。清貴は、ピアノ、と言わずにキーボード、と言った訳で、それならば香さん宅でちょこっと弾いた、あれぐらいしかない。あれを「やってる」とは言わないだろう。

「いや、全然」

「そうかあ。割と勿体ないと思うんだけどな。翔斉で見た時思ったもん、兄貴の正体見破ったり、って」

胸の奥が少しざわめいた、気がした。

「じゃあやっぱり、兄貴は堅実に公務員にでもなるつもりな訳？」

「ミュージシャンの道でも突っ走るんじゃないかと思ったのか？ ちょっと俺の中では現実感ないなあ。弁護士資格を狙ってはいるけどね、一応」

「……それ、兄貴にとっては『現実的』なんだよなあ……」

やだやだ東都大生は、なんて言ってあからさまに溜息などついてくれる。とは言っても、清貴は俺になんてほとんどコンプレックスなどないだろう。俺が清貴に抱いているコンプレックスの大きさに比べれば。本当に大事なものは勉強の出来映えなんかじゃないのだから。

清貴はいい。俺が喉から手が出るほど欲しいものをたくさん、当たり前のように持っている。清貴はいい。

(憧れるばかりで)

ざくっ、と斬られたような痛み。見えない血が頬を伝う。

(だって俺には何もないから)

コーラの缶を開けるのにも似た音を伴って、バスのドアが開いた。俺はひとつ、頭を振った。さあ心の準備をするんだ。降りればすぐに、懐かしの我が家。

この時間じゃまだお父さんが帰ってる訳はないので家にはお母さん一人で、やっぱり、と言うか何と言うか、風邪を押して熱烈歓迎して下さった。お茶とお手製のお菓子と矢継ぎ早の質問。

「どう、雅貴さん？ 大学のほうはうまくやってるの？」

「ええ、順調ですよ。今の所単位も余ってますし」

一口お茶をすする。

「そうでしょうね。それは心配してないのよ。東京の国立なんかだと、いろんな人がいるでしょう。悪い友達なんか作ってない？ 大丈夫？」

「いませんよ、そんなの」

悪い友達ね、とぼんやり思った。俺の友達だ、俺にとって嫌な人間である訳がない。お母さんはとても心配性だ。お母さんの頭の中では、俺は—清貴も、だろう—まだほんの小学生ぐらいの子供であるらしい。

それならばそう思わせておいてあげよう。そうです、僕は小さな子供です。あなたの肩ほども背の伸びていない、何も知らない無垢な子供。目を覚まさせてしまうのは忍びないから。俺が演じ続けていけばいいだけの話だから。

「そういえばこれ、お土産です。サークルで尾瀬の方まで行ったので」

紙袋から取り出した箱に、すばらしい速さで清貴が反応した。……相変わらずだ。

「おおっ！ 何？」

「温泉饅頭。きっちり薄皮だよ」

「サンキュー、もらうよ」

ばりばりと包装紙を破り始める。

「清貴さん、先刻もお菓子食べてたでしょう。夕飯に響くから後にしなさい」

「分かってまあす」

などと言いつつ、もはやひとつめにかぶりついている。黙っていればいつの間にか一人で全部食べてしまう、清貴はそういう奴だ。まあ一日の運動量を考えれば、納得はできるような気がする。

「サッカー部なんだからこれぐらい平気でしょう。お母さんも食べたらどうですか？」

俺の分と、お母さんの分も取って目の前に置いてあげた。お母さんはそうね、と言ってゆっくり包み紙を開け始める。俺はまたお茶をすする。少しぬるくなっていた。

一通り食べ終わって満足したのか、清貴はふらっと居間を出て行った。うちの家族は清貴でもっているのだと思わずにいられない。部屋がほんの少し暗くなったような錯覚に捕らわれる。何とはなしに、俺はテレビをつけた。メロドラマには遅い、ニュースには早すぎる時間帯。どちらも別に見たい訳ではないけれど。

ふと何かに気づいたように、お母さんが口を開いた。

「冬の山じゃ危険だったんじゃないの？ 事故に遭わなかったでしょうね、雅貴さん？」

「遭ってたら今頃大変ですってば。何なら、試してみます？ 触れるかどうか」

軽い冗談、のつもりだった。それに対するお母さんの反応も大体のところ、察しがついた。お母さんは噛みかけの饅頭を強引に流し込むようにお茶を口に含んだ。

「質の悪い冗談はやめてちょうだい」

悲愴感は漂うけれどあまり迫力はないお母さんの声に、俺は顔を伏せることで答えた。次ぐ言葉を黙って待つ。

「期待してるのよ。お父さんはあなたに跡を継いでもらいたがってるみたいだけど、私は特に気にしないわ。でも少しでも立派になってもらいたいのは同じなの。いい？」

「—はい」

俺は頷いた。頷くのには慣れていた。

期待してるの。立派になって。あなたならできる筈。言葉には無形の圧力がある。

(でも、決して信じてはくれない—)

夢を見た。

いつのことだか、はっきり思い出せる。これは高校一年。何故なら、俺がまだ弓道部にいた頃だから。困ったものだ、人間は……肝心な時に限って記憶が消去してくれない。見たくもないものを心の隅隅は確かに憶えていて、有無も言わせず目の前に突きつける。何も一日六時間の休憩の最中を狙わなくてもいいじゃないかと思うのだけど。

俺は中学三年の頃、一人の女子に呼び出された。同級生の篠宮佐世子さんという人だ。とは言っても、俺のほうには最初、まったく心当たりがなかった。同じクラスになったことはあったけど、その中でも佐世子さんはおとなしい——はっきり言って、あまり目立たないほうの部類に入る人だったように思う。

だから佐世子さんに告白というものをされた時も、申し訳ないけれど鳩に豆鉄砲だった。そういえば同じクラスだったっけ、ぐらいの面識でしかなかったから。

でも、逆に言えば、だから俺には彼女の気持ちを断る理由がなかった。よく知らないのだから、嫌いとはいえない。嫌いでないなら、無下に断るのは失礼だろう。佐世子さんのこの時の雰囲気は、俺にそれを許さなかった。

「——いいよ、僕で良ければ」

少し考えて、俺は確かそう答えた。見るからにおとなしげな彼女の、ためらうようで、それでいてこちらを射抜くような視線。……ほだされたと言えればそれまでなのだけど。

彼女は明らかにほっとしたように息をついて、呟いた。

「良かったあ……」

校舎の陰を吹く風は、春だけどまだ少し冷たかった。

そんなことがあった。

これは合格発表の時だ。佐世子さんと、二人で行った。翔斉に着いた途端に他の仲間と次々に鉢合わせたので、そこで合流してみんなで見に行った。

掲示板を前にして、仲間のうちの何人かは肩を落とし、俺を含めた残りは胸をなで下ろした。状況的に、あまりあからさまに喜ぶことはできなかったけど。状況が素直な感情の爆発を許さなかったのは、落ちてしまったほうも同じだったらしい。

「おう、野郎ども！ 今宵は共に飲み明かすぞ！」

肩を落とした組はそう叫んで、からから笑いながら一足先に帰って行った。残された俺達は、何とはなしに苦笑いの顔を見合わせる。佐世子さんと、俺と……もう一人、武藤。

「……よお、相沢と篠宮って、付き合ってたんだ？」

かなり間があって、武藤はそんなことを言った。俺はちらっと佐世子さんのほうを見てから、軽く頷いた。

「うん、そういうことになるね」

「へーえ……知らなかったな。いつからだよ、え？」

興味津々、といった風情。俺はなるべく曖昧に笑った。

「それは、答えない自由を認めてくれるよね？」

「……そう来るか。まあ、確かに。どうしても答えるべきだなんて思っていないから安心してくれていいんだけどさ」

この話題はそれで終わった。あとは昼ご飯をどこで食べるか、マックがいいか、立ち食いそば屋にするか、それとも奮発してレストランにでも陣取るかといったような相談になだれ込む。結局マックに決まり、途中で家に電話を入れつつ駅前に向かった……。

—暗転。

弓道部で新入部員の正式な顔合わせがあったのは、四月の半ばぐらいだった。男女合わせて、全部で二十人ちょっと。今年は思ったよりずいぶん入りがいいな、と先輩が言っていた。

道場に円を描くように座る。一人一人の目の前にジュースとお菓子の盛られた皿が置かれている。俺はざっとその場の全員を見回した。と言うか、一年生はほとんどみんな、同じことをしているようだった。

見渡した中に、もちろん見覚えのある顔はほとんどなかった。見知っていたのは、中学でも同じ部活だった武藤だけ。武藤は俺と目が合うと、おう、という形に口を開いて、短くにと笑った。

ひとまず自己紹介が終わると、お互いの顔と名前が一致したとも思えないまま飲み食いになだれ込み、するするとパーティは進行する。先輩はあちこちに動いて話題を提供して回るし、一年は一年で仲間の把握にいそしんでいる……。

終わってから、少し武藤と話した。他愛のない話の中で、俺は何となく問うた。

「最初の頃はいなかったみたいだから、やめたのかと思ってたけど。やっぱり来たんだ？」

「ああ……」

頷いて、武藤は少し考えているようだった。

「正直言って、どうしようかと思ったよ。他のことやりたい気もしたしな。でも結局他に思いつかなかったんだよ」

「そうなんだ」

「ま、それに……弓道部って、ざっと見たところ可愛い女の子多そうだったし？」

そう言った武藤の口調は妙に真面目だったけど、顔は笑っていた。俺も少し、笑った。

—暗転。

ちょうど最近、佐世子さんを取り囲む環境が割と気に懸かり始めていた。

梅雨が終わり、夏休みまであとわずか。それは部活の練習が本格的に厳しくなることを意味したりもするけれど、とりあえず夏休みは無条件に楽しみなもの、相場が決まっている。どうせ勉強しなければいけないにしても、先生の言うがままでなく自分の好きなようにできる分、効率が良いと言えば良かった。

七月。いい加減部員全員の顔と名前が一致する頃。ある程度、友人もでき苦手な人もできて好きな人もできる人は、できる。その中で、佐世子さんを彼女にしたがっている人がどうやらいるらしい……噂だけど、あくまで。

でも多分、本当に気に懸かっているのはそんなことじゃない。ライバルって言うのか？—そう

というのが出現したことよりも、それを気に懸けているという自分の心境が。ひいては、俺をそういう気分にさせてしまっている、今の自分達の関係が。

その日の練習の後、吹奏楽部の練習を終えた佐世子さんと合流して、俺達は普段通り一緒に帰った。外はもうかなり暗くなっている。

(これなら顔色が見られなくて済む)

例の噂について。話すなら今だ。今ならジョークにできる。笑い飛ばしてしまえば、もう何も問題はない。それがたとえ少しばかりぎこちない笑顔だったとしても。

(佐世子さん、君ってどうやら、かなりもててるみたいだよ)

(気が弱い僕としては結構心配なんだけど)

「—ねえ、雅貴君」

佐世子さんが言ったのは、俺がちょうど口を開きかけた、その時だった。

「あたし達がつまり、こういう関係だって、弓道部の人達って知ってたりするの？」

「知ってるんじゃないかなあ、多分。感づいて訊いてきた奴には、どうやら武藤がもれなく解説さし上げてるらしいから」

「わー、武藤君らしい……」

隣でふふっと笑う声が聞こえる。

「じゃああの噂、やっぱり嘘なのかな。弓道部の男子の中に、あたしを好きな人がいるって小耳に挟んだんだけど」

笑い声のついでのように、何気なさすぎる口調で佐世子さんは言った。

「……どうなんだろう。でも大して問題ないんじゃないかな」

噂は確かに男子部の間では公然の秘密だ。ちなみに、誰が彼女を狙っているのかも、具体名つきで広まっている。でも問題はない。ない筈だと思った。

俺達は成り行きのままに、帰り道の途中の小さな公園に入った。子供は、一時間ぐらい前なら遊んでいたんだろうけど、今はすっかりいない。無人だった。俺も佐世子さんも、多分同じことを考えている……。

倉庫の陰。ここなら車道から見られない。最悪通りがかりの人に見られたとしても、電灯から離れているのでシルエットだけで済むだろう。その代わりに、お互いの顔すらも怪しいけれど。

俺は佐世子さんの顎に手を掛けた。佐世子さんが目を閉じるのが暗闇の中にうっすらと見えた。彼女の唇と俺のそれが触れる。何回目だっけ……とりあえずそんなに多くはない、彼女とのキス。聞こえる息遣いは俺のなのか佐世子さんのなのか、おそらく両方だろうと思う。夏だけど、時折吹く風は結構涼しかった。

割と長い間。その後で。

「雅貴君、何かちょっと手慣れた感じ。どこかで練習でもしてるの？」

そう言った佐世子さんの表情は笑っているようで、でもどこか真剣なようでもあった。ならば俺も、と思った。そっちこそ、どうなんだい、あの噂—。

「……嘘です。ちょっと言ってみただけ」

言いかけた俺の言葉は、佐世子さんの屈託ない声の前に行き場をなくした。仕方がない。少し笑って、心気一転。

「ひどいな、キスの後に言うジョークじゃないよね」

「ごめん」

顔を見合わせる。問題はない。そう思った。

—暗転。

「相沢、お前恋愛に関する悩みがあるんだって？」

唐突な、と思った。

場所は道場の用具室、訊いてきたのは部活の仲間で佐世子さんと同じクラスの井崎—ちなみに言えば、うちの一年男子のうちの二人ばかりが佐世子さんを好きらしいという、例の噂の登場人物の一人だった。

「え、恋愛に関する悩みって何だよ」

そんなものあったっけ。俺は素知らぬふりでそう訊き返してみた。井崎が何を言いたいのかは、かなりの線で察しがつくけれど。

「お前と篠宮、マンネリだって聞いたけど」

「.....それは、必ずしも答える必要はない質問だと、僕の間感では思うんだけど」

何を考えた訳でもなく、口はほとんど自動的に動いていた。この言い方では井崎は勘に触るだろうなと思いながら彼の表情を見る。案の定だった。

魔が差した、と言うべきか、俺は誘導尋問じみた言葉を付け足した。

「もしその通りだったらどうするつもりなんだ？」

「もらう」

即答。断言。一刀両断。

宣戦布告としか受け取りようのない井崎の一言に、俺は苦笑いでやり過ごすより他に対応する方法が見つからなかった.....。

—暗転。

トライアングル・ブルー・プラスワン。年の瀬になってくると、状況もキャストも既に確定していた。

一人の女の子に強く恋心を抱く男二人。ところが女の子には彼氏がいる。しかもこの恋人達、最近ちっとも熱くない。かくして彼女を中心に放射線状の人間関係誕生。.....まるで他人事のようにだ。放射線の一条は確実に自分が発しているというのに。

彼女を嫌いという訳じゃない。それは確かだった。今でも好きだと言って間違いはないと思う。だからこそ、困った。佐世子さんには選択権がある。三人のうちのいずれかを選ぶ権利が、あるいは誰も選ばない権利が。

よりによってあの公園だった。倉庫の陰で向かい合って、佐世子さんは俺に尋ねた。

「ねえ、雅貴君、どう思う？」

強すぎる眼差し。俺の周りの空気だけ、凝り固まって圧力を増したように感じる。

「あたしには三つ、選択肢があるの。ひとつは、このまま雅貴君と付き合い続けていくこと。ふたつ目は、井崎君に返事をする事。もうひとつは.....」

「武藤の気持ちに答えること、だよな？」

気がつくのと、佐世子さんの台詞を引ったくっていた。佐世子さんはしばらく何も言わず、身動きもしなかったけれど、やがて小さく頷いた。

「そうよ。ついこないだ、武藤君にも言われたの」

ショック、と言うべきなのだろうか、今の俺の心境は.....でも悲しみや敵意では多分なかった。

(そうなんだ)

ただそれだけを思った。ああこれで武藤の今までの行動のすべてに納得が行くと。俺に対してあまり友好的でなかったのも、最初の志望校を変更して翔斉を受験したという話も、すべて。「雅貴君、あたしはどうしたらいいと思う？」

白い息とともに繰り出された彼女の言葉は、俺の中に浸透するのにやけに時間がかかった。「どうするのが一番いいと思う？」

視界が赤く染まる。そのあまりの鮮烈さに俺は――。

目を開けると、強烈な朝日が目を射た。少しだけ目に涙がにじんだのは、きっとそのせいだと思ふことにした。ラストシーンはまだ来ていないのだから。この続きは起きながらにして見られるかも知れないのだから。

――できれば見たくなんかないけれど。

-chapter 5-

スーツなんか着るのは久し振りだった。正確には初めてだけど、高校のときの制服がスーツタイプだったから、感覚としては「久し振り」だ。何にしても、収まりの悪い感じがするのは否めない。

同じような格好をした男達や振り袖姿の女子達が、開かない会場のドア付近で集まって喋っている。俺も完全にこの群衆の中の一人と化していた。まだ式が始まってもいないうちから、終わった後の打ち上げの話などしたりする。今日は日曜日、つまり振替で明日も休みだから、みんな相当にはじけるつもりらしい。俺もそのおかげでスケジュールが楽になって助かっている。何せ、俺の場合学校は東京にあるから。

「おい！」

後ろから声がある。誰を呼んだものなのか、一瞬分からなかったけど、鼓膜を通して伝わる響きに記憶の隅っこをつつかれて、俺は振り返った。タイムトリップ。一般教養と専門基礎の単位の勘定に塗りつぶされた筈の記憶が自己主張を始める。

「名瀬ちゃん？ 久し振りだな」

「ああ、やっぱり相さんかあ。変わってないな、基本的に」

「基本的にとって何だよ」

「老けてるとこは変わってない。でも老け具合がレベルアップした。そゆこと」

そんなに老けたかな、と思った。老ける、っていうのは大人になることと違うんだらうか。おそらく違うんだらう。別の言葉で表わされるからには。年を経ることを成熟することと捉えたら、ネガティブなニュアンスのある「老ける」はそぐわない。年をとるごとに積みゆく垢、漂う疲労感、そういうものに目をつければ、なるほど正しい表現のように思える。……そうか、俺、疲れてるんだ？

そう言う名瀬ちゃん本人はというと、これもまた、笑えるほど変わってない。背が伸びたとか、髪型が前は確かこうじゃなかったとか、外見の間違い探しを始めればきりが無い。そういうことじゃなかった。

（オーラ、が）

根本的なところが昔のままで、それは多分、むしろ当たり前のことで、かえって違和感を覚えた。確実に五年が過ぎたこの場に、五年前の人間がいることに。いや、おそらく逆だ。違和感を醸し出してるのは俺自身かもしれなかった。正しいのはまるごとタイムトリップしたかのようなこの空間で、俺はここに紛れ込んだストレンジャー。

「何、今日はマサキちゃんの母御前は来なかったの？」

新しい声の名瀬ちゃんを大爆笑させて俺を脱力させた。そういえば昔から俺を「マサキちゃん」と呼んではばからない彼女は古内さんだ。個性的で大胆不敵な人だけど、何故かあの佐世子さんの友達だったっけ。……それはともかくとして、困ったこと覚えてるなあ。決してお母さんが迷惑な訳ではないんだけど。

古内さんのすぐ後ろから女子の一群がやってくる。かつての仲良しグループは健在らしい。その中にサヨ……篠宮さんの姿もあった。目が合う。こんな時にふさわしい表情は——苦笑、だ。

「来ないんだ、ご期待に添えなくてごめんね。出がけに力一杯止めてきちゃったから」

「母ちゃん頼むよマジで一生のお願いだから来ないでくれよ、ってか？」

けけけっ、なんて笑いながら名瀬ちゃんが言う。みんな笑った。俺も笑った。

「そんなとこかな」

過去のことだった。

金持ちなくせに市立の中学なんか来て冷やかしのつもりかよと因縁をつけられたことがあるとか、まるでそれを裏づけるようにお母さんは何かといえ ば高いスーツに身を包んで学校にやってきたとか、保護者面談では俺の学業成績のこと以外眼中になかったとか、お父さんに至ってはなから俺の志望校は翔斉と決めていたとか、そんな調子だから俺が篠宮さんと付き合っていることがばれた時には両親とも当然いい顔をした筈もなかったとか。そういうことは過去の話だった。

鳥の頭が恨めしくも羨ましい。どうして次から次へと忘れてくれないんだろう。どうしても取っておきたい記憶なんて大してないのに。日常なんて、結局は繰り返しのだから。昨日のことを忘れたって、今日という日がリプレイしてくれる。忘れるための日々を食いつぶしていく。

今朝の夢のことも、その夢の続きも。みんな過去のことだ。もうすぐ二十歳になる自分とは断絶した、過去のことだ。その筈だった。それなのに。

二十歳になって、人はどれぐらい変わるのか。大して変わりやしないだろうことを、俺は知っている。世界が変わってしまえばいい、この姿も記憶も 全く別物になってしまえばいいのにと 思った。でもそんなことはあり得ないというの、また嫌というほど分かっていた。

成人記念品と称して、何やらいろいろなものを渡された。ああこれが「二十歳」なんだと思った。たくさんの荷物と、それに伴うほんの少しの重み。

酒の匂いのする街中へとみんなくり出す。駅前にはうちのクラス以外にも、おそらく同じ目的だろう団体がいくつも見られた。二十人からの大所帯で居酒屋の席がみるみる埋まる。コンパというものは基本的に、どの顔合わせでも雰囲気は変わらないらしい。

「おい、みんなまず最初はビールでいいよな？」

「あたしビール駄目一。何か他にないの？」

「飲み放題はサワーとカクテルだけだから。その他は飲みたい奴らで適当にやれや」

「カルピスサワー、飲む人一」

「はーい」

「あ、俺も飲むわ」

「みんな弱者だなあ。誰か一緒にポン酒行かねえ？」

「やめとけよ、潰れるぞ」

「どうでもいいけどつまみ、つまみ！」

「あ、梅茶漬けよろしく」

「俺、鮭でね一」

「完結するな、そこ！」

「オーダー取るぞ、さっさとしろよ！」

「唐揚げ、焼き鳥、お好み焼き、ツナサラダ！」

「すいませーん、オーダーお願いしまーす」

高々と手を挙げる人、テーブルごとに注文取りまとめる人、飲む前から酔ってる人。笑い声。

人いきれ。酒の匂い。

中学の仲間だから、こうやって酒の席でテーブルを囲むのなんて初めてだ。ビールとおつまみが出てくる頃になると、かつてのヒエラルキーも復活。からかう人間、からかわれる人間。無責任にはやし立てる人間。恋しい彼女に思わせぶりな彼。全てがほどよくノスタルジー風味で、一種私小説的な面白さがある。人間模様の妙。これが他人事であるならね……。

別に恐れてなどいない。恐れるべきものなど何もない。うまの合わなかった元クラスメートと再会する、ただそれだけ。その筈なのに、セピアのモノトーンの視界の中で、武藤一人だけが鮮明フルカラー画像だ。

(人の従姉に余計なちょっかい出すな、って)

(武藤昭道。あたしの従弟)

良く出来てると言うか世界は狭いと言うか。つまり芋づる方式のくじ引きだ。任意の出会いが箱の中でつながり合っていた訳だ。……わざわざ伝言するなんて。よっぽど嫌われてるのかな。

「おーい、マサキちゃん！ 目が虚ろ！ こっち来なよー！」

早々といい気分になってるらしい古内さんから呂律の怪しいお招きを受ける。勧められるままに古内さんのとなりに行くと、向かいの席に篠宮さんが座っていた。

「相沢君、元気？」

……フルカラーがもう一人いた。

篠宮さんがこれでなかなかのうわばみだということ、俺は今日初めて知った。その上かなりの飲ませ上手だ。意外といえば意外だけど、似合ってる気もする。

「篠宮さんも、元気でやってる？」

「まあ、それなりにね。スキー・テニスサークルなんてありきたりなのに入ってるわ。コンパばかり」

「それで酒強くなったの？ それとも昔から？」

「うーん、ずいぶん鍛えられたけど。何か実はあたし、素質あったみたいよ。よく考えれば父も母ものんべなのよね。やっぱり遺伝するのかしら」

けらけらけら、と笑い声を立てたりする。朗らかななんて形容の似合う人じゃなかったような気がするけど。その変わりようが改めて時の経過を感じさせて、何となく俺はほっとした。五年前モードに戻りきれていないくちがここにもいる。

「相沢君、東京行ってるんだっけ、今？」

「そうだよ、こいつ、映えある東都大生だもん」

篠宮さんの隣に陣取った名瀬ちゃんのご丁寧に解説してくれる。名瀬ちゃんはそういえば、篠宮さんと噂になったことがあったっけ。あんなにしょっちゅうからかっているのは、絶対篠宮さんのことが好きな証拠に違いない、とか何とか。実際のところはどうか分からずじまいだったけど、とりあえず今先刻も「篠宮、今フリー？」なんて訊いてたところを見るには、まんざらでもないのかもしれない。とか何とか言ってるうちにまた名瀬ちゃんは別のグループの所に顔を突っ込んでいる。忙しいなあ。

「東都大？ 学部どこ？」

「法学部」

「わー、秀才だあ。キミこそ3-Eの出世頭！」

あ、あ……それは何ていうか、翔斉OB同士で言いあってもっていう気が。

「じゃあ、もう女の子なんか脇目も振らず学業三昧？ あ、でも相沢君ならどっちもそつな

くやってるかな」

「まあ、そんなご大層なもんでもないけどね」

「いそいだよね、彼女」

「いるように見える？」

「見える見える」

他愛のない話。また一口酒を含む。

「あれさ、篠宮さんって今付き合っていないの？」

アルコールの潤滑作用を借りての問いかけ。誰と、とは言わなかったけど、彼女は頷いた。当事者は向こうのテーブルに着いている。

「ああ。昭道君とでしょ？ ただいま深刻な冷戦状態突入中」

屈託がない。少なくとも俺にはそう見えた。かと思うと、彼女はいきなり巨大な溜め息をついた。

「……あたしねえ、ちょっとがっくりなのよ。もう恋なんてしたくないわ」

さすがに回ってるのだろうか。呂律が怪しくなってきた。

「どうしたの？」

「どうしたもこうしたも……最悪よ。あたし、男に嫉妬しなくちゃいけなくなっちゃってるんだから。分かる？ ひどいでしょお？」

その後、二次会の会場でも篠宮さんはすさまじい量を平らげ、完全に潰れた状態で友達に支えられて帰って行く。このあたりで一旦解散という感じだろう。三次会に繰り出す人ともう帰る人が半々ぐらいに分かれる。俺は帰らざるを得ないだろうな。

「相沢、帰んの？」

武藤、だった。俺は頷いた。

「武藤も？」

「—ああ」

……じゃあ最寄り駅までは確実に一緒だ。

帰宅組は適当に三、四人ぐらいのグループを作って酔っぱらい独特の無闇やたらな大声で喋りながら歩いている。だからきっと、俺と武藤は傍から見るとひどく浮いてるに違いなかった。一緒に歩いているとも思えないような充分すぎる距離を取っておきながら、お互い他のどのグループの話に首を突っ込むでもなくただ黙々と歩いている。俺は足下に煙草の煙を吐き出しながら、武藤はポケットに両手を突っ込んで雪でも降ってきそうな空を眺めながら。

「……相沢、お前さ」

不意に武藤の声がする。歩幅二、三步分の距離にとってはぎりぎりの音量だ。

「何？」

「伝言、聞いたか？」

来たか、と思った。

「—ああ。香さんからのだろう？ 聞いたよ」

「ならいいんだ。そういうこつたから、頼むな」

「それは、つまり香さんと別れろってことか？」

「愚問だな」

平然と答えの分かりきってる問いを口にする自分にも、それに対して二の句も告げなくなるくらいきっぱりと言い放つ武藤にも、俺は呆れた。

こんな時には……溜め息。何を考えた訳でもなく、ほとんど反射的に。どうせ煙を吐き出すついでだからというのもあったけど。

「だいたい、お前、むかつ腹こなかった訳？ 仮にも自分の女に、そんな伝言されてさ。香も香だよなあ、律儀に伝える奴があるか？ 可哀相にな、お前、相当脈ないぜ」

煙草の火を消して屑籠に捨てた俺の手が、少しも反応しなかったとは残念ながら言えない。

—ぴくり、と。

怒り？ 驚愕？ どっちでもあるようで、しかしどっちでもないようでもあった。それはつまり、武藤が一体どういうつもりで今の台詞を口にしたのかということにつながるのだろうが、どうも何か引っかかるのだ。何か……。

「それは、武藤じゃなくて彼女の領分だよ。脈がある、ないの話はね」

芸のない反論だと分かっていたし、事実武藤も喉の奥で短く笑っただけだった。

(ほら、また沈黙)

コートのポケットから煙草とライターを取り出して火を点ける。夜陰に白い一筋。視線を前に固定したまま。横にずらせば、武藤と目がかち合うだろうから。圧力を感じる。今武藤は、多分ものすごい表情で睨んでいる。俺のことを。

「—相沢、まさかお前、溜め息隠すために煙草始めましたなんてたわけたこと言いくさらねえだろうな」

……むせるかと思った。

「ま、いいけどよ、別にどうでも」

吐き捨てるように言う武藤。視界の端に、ささやかな音を伴って転がってゆく石ころが見えた。

気がつくのと、他の人間はもうずいぶん先へ行ってしまっていた。俺はちらっと隣—というのも語弊があるかな—に目をやる。顎で前を示して、武藤は言った。

「別にあっちに逃げたってかまやしないんだぜ？」

意図的に、答えないことに決めた。その代わりに俺が口にしたのは、自分でも魔が差したとしか思えない問いかけだった。

「—武藤、お前は向こうへ行く気はないのか？ 潰れてる人がいるから、手を貸してあげれば喜ぶと思うけど」

「お前さ—……」

じゃり、と砂を噛んだような感触の声。

「こういう場で、こういうタイミングで、そういうことを無表情で言い出すお前みたいな奴が、俺は最っ高に嫌いだよ」

「そうか」

武藤は露骨に舌打ちをしてくれる。別に皮肉を言ったつもりもなく、ただ本当に一言、そうか、としか言いようがなかった。……他にあれば、教えてもらいたいものだ。

「ひとつ言っとくけどな、相沢には俺と佐世子の関係を云々する権利なんざないんだぞ」

抑え込んだ低い声で言ったかと思うと、武藤はいきなり俺のコートの袖を引っばって横道に入り込んだ。鋭すぎる眼光。ゆらり。ぶれ始める風景。—同じだ、あの時と。

「俺はまだ許しちゃいねえからな、分かっているとと思うがよ」

(一生許さねえ)

(お前みたいな最低野郎も滅多にいないぜ)

だぶる。重なる。

「忘れたなんてこたあないよな？ お宅は頭がよろしくていらっしゃるんだからな？ ……佐世子にあんなこと言いやがって、よくもああ的確にデリカシーのないこと言えたもんだぜ」

(君の自由にするのがいいんじゃないかな？)

ああ覚えている。確かそう言った。佐世子さんは誰がいいのか、そればかりは僕にも何とも言えないよ、と……。

そうしたら佐世子さんは笑ったのだ。そうよね、きみに相談するなんて間違ってたわ、と。雅貴君、呆れちゃうぐらい好青年だからあたしとは不釣り合いだよ、じゃあさよなら。そう言って駆け出して行ってしまったのだっけ。

—何がいけなかったのか。

ああそうとも、俺には分からない。俺は馬鹿だから。どうしようもない馬鹿だから。どこから狂い始めたのか、俺はどうすべきだったのか、分からなくて……壊れた。

「とにかく、あれで俺はお前を見限ったから。もう俺の視界をうろちょろしないでくれよ。俺に関係ある女に接触すんな。カオリからもさっさと手を引け。あいつは俺の従姉だ。分かったな」

強張った声がひそやかに響く。

なるべく平静を装って、俺は武藤に告げた。

「分かった。ごめん。香さんと上手くやれよ」

「……野郎！」

拳が飛んできた。避けられなかったし、避けるつもりも俺にはなかった。

-chapter 6-

.....そうだ。あの後、俺は武藤に呼び出されたのだった。陽の当たらない道場裏は他のどこにも増して寒かった。

用件は分かっていた。武藤がわざわざこんな場所を選んで俺に話す内容は、小説じみたトライアングル・ブルー・プラスワンの決着の如何である筈だった。

「単刀直入に言うぞ。昨日、篠宮が俺んところに来た」

「.....そうなんだ」

ざりざり、と足下の土を爪先でほじくり返しながら、武藤は俺を睨みつけてきた。

「まるで他人事だな。まあいいけどよ。で、篠宮、言ったぞ。俺にするって」

俺にする。この一言が、ショックでないと言ったら嘘になる。あの時佐世子さんにすべて委ねた筈なのに、それが一番良いと決めた筈なのに。でももう、何を言っても無駄だということは分かっている。俺に背を向けて武藤のもとへ去った。これが彼女の決断なのだ。それを許したのは自分なのだ。分かっていた。

「その面、やめろよ」

ばん、とフェンスを蹴りつけてから微妙に間合を詰める武藤。

「そんな悟り澄ましやがった面でいいのかよ？ お前、何か篠宮にひでえこと言ったんじゃないのか？ 泣いてたぜ」

「—え」

「お—お、泣いたって言えばとりあえずは反応する訳か。結構なことだな。.....涙なんか一っ粒も見せやしなかったぜ。泣かれたほうがよっぽどましって顔だったけどさ。何言ったんだ、あいつに」

ごまかすつもりだったのだ。本当は。でもできなかった。

「言っとくが、答えない自由は認めてやんないからな」

「分かった、言うよ.....。君の自由にしなよって」

最後まで言うことはかなわなかった。気がつくやうに武藤が拳で俺の顔を殴ってきたから。鈍い痛み。じわっと口の中に広がるのは鉄の味。

「てめえ！ も一遍言ってみろ！」

「佐世子さんの自由にするのが一番だ、って。どうしたらいいかって訊かれたから、それは僕が決めるべきことじゃないし何も指図はできないって。そう言った」

容赦なく、二発目が飛んできた。今度は予測がついたけど、避ける気も起こらなかった。

思い切り殴られて、罵られてしまえばいい。俺など。せいぜいみんなの期待を裏切らないように立ち回るしかない、こんな自分など。いつもそればかりを考えてきた。でも結局駄目だった。俺は失敗したんだ。どんなに殴られても文句は言えない。

「.....分かった。たった今よ—く分かったよ。お前は最低だな。お前みたいな最低野郎も滅多にいないぜ」

(最低)

言い切られて、むっとするよりむしろ納得してしまった。言われてみれば実にその通りかもしれないと思った。そうか、俺は最低なんだ。何だそうか.....。

「お前さあ、本当に篠宮のこと好きだったのか？ 何かお前のやってること全部そらぞらしく見えるぞ？ 本当は何もかもどうでもいいんじゃないのか？」

それは違う。ぼんやりとそう考えた。頭の処理スピードが呆れるほどもたついている。
「何も言えないか、そうだろうなあ。お前は篠宮のことなんかどうでもよかったんだ。隣にいるのが誰だって同じ、お前にとっては自分以外大事じゃないんだろ。冷たい奴だな」
「ちが……」

「違う？ どう違うんだよ、ええ!? お前のやってることがそうなんだから仕方ねえだろ！ お前は篠宮じゃなくても良かったんだ。誰でも……ああ そうさ、誰だって良かったんだ。誰一人、お前にとっての特別にはなれないんだ。違うかよ！」

それは違う。誰でもいいなんて。自分以外大事じゃないなんて。そんなことはあり得ない——！
逆だ、逆——俺自体には大した価値もないから。たまたまちょっとだけ優等生になる素質があっただけで。俺自体には何の価値もないから、せいぜいみんなの期待に沿うように。でも分からないことだらけだった。いろんな期待が、要求が俺にのしかかる。それら全部に応える術を俺は知らなかった。俺がどんな行動をとっても、必ず誰かの期待を裏切る。

「——一生許さねえ」

……怖かったのだ、俺は。

朝食の後、俺はお父さんに呼ばれた。お父さんが家にいるというのは珍しいことの筈だった。
「雅貴、お前ももう再来年は卒業だろう。就職のことは考えているのか？」

「ええ、今のところはですけど、弁護士の試験を受けてみようかと」

この答えが、お父さんにとってベストではないことを、俺は知っていた。お父さんは俺に法律関係の仕事に就くことをことさらに望んではいない筈だ。

「そうか、弁護士か……」

あまり歯切れの良くない口調で、お父さんは呟いている。

「お前、私の下で働いたらどうだ」

私の下で。——小さな小さな棘。

「お前はもちろんまだ未熟だが、見込みはある。ある程度見習い期間を取ってからでいいさ、お前が私の所で働いてくれれば、将来的にかなり助かるんだが」

「……それは、ゆくゆくは僕にお父さんのポストを譲るということですか」

「まあ、そういうことになるな」

俺は考える——までもなく、答えは決まっていた。この俺が企業マンなど！ 自己分析するに、あまり向いていないような気がする。能力的には分からないけど、性格的に。はっきり言って、たちの悪い冗談だろうと思う。

「あの、こう言うのも何ですけど……僕より清貴のほうが向いているんじゃないですか？」

ほんの少し、お父さんの眉がひそめられるのを俺は見た。それは想像の内にあったから、別に驚きもしなかったけれど。……にしても情けないものだ。これがせめてもの抗いであるとは。

「清貴はな……度胸というか、思い切りのよさが軽率という欠点に化けかねん。お前ならまずそれはなかるう？」

「思い切りがいいのはいいことですよ」

(もう戻りたくはない)

せっかく脱出を果たしたのに。俺はまた引き戻されるのか。お父さんもお母さんも裏切らずに自由を手に入れることができた。その筈だった。

籠の鳥に幸せを見出すことはもうできない。

「僕は石橋を叩きすぎて壊しかねませんから。会社の未来を考えるなら、清貴のパワーこそが望

まれるような気がしますけど」

お父さんの渋い顔を直視するのに、俺はかなり努力した。もしかしたらそれはほんの一瞬の間だったのかもしれないが、おそろしく間延びした一瞬だった。

「—それについては、また今度じっくり話そうか」

午前中のうちに実家を出て、お土産をひと通り買い込んだら、ちょうど駅に向かうべき頃合いになっていた。

春休みに入ったらそっち行くから、泊めてくれよ。改札の前で清貴がそんなことを言った。ディズニーランドにでも連れて行ってやろうかと俺が冗談げに言うと、野郎二人なんて虚しいからやめてくれ、だそうだ。……この上もなく正論だと思う。

東京行きの特急が乗り上げるホームに立って、高校までを過ぎた街を後にすることを思った。別に名残り惜しくはない。ただ、懐かしい夢から目覚めた朝のような、軽い喪失感だけが。でもそれも下宿に帰り着けばすぐに忘れてしまうだろう。そう、あたかもベッドの中で見た夢が瑣末事に追われるうちに記憶の外に消えてゆくように。

(さよなら)

さよなら。別れの言葉じゃなくて再び会うまでの約束だと、歌の文句にあったっけ。そうなのか、と思った。でも他の言葉が俺には思いつかないから仕方ない。さよなら、だ。……多分。そのために実家を出たのだから。

親戚の会社の重役を務めている厳格な父親。良家のお嬢様そのままの母親。俺のどこを気に入ったのか、よく懐いてくれる清貴。中学、高校時代の友達、知り合い。名瀬ちゃん、宇野、遠山、井崎、武藤に……篠宮さん。

—俺はこれからどこへ？

軽く頭を振った俺の耳に、その時空虚に澄んだチャイムが聞こえた。

『…番線に、東京行き、xxx5号がまいります。白線の内側に下がってお待ち下さい…』

続いて女性のテープ音声で、俺の乗る電車の名前を告げる。ふと手の中の切符を見た。まだ財布にもしまっていないなかったことに気がついた。東京行き。これに乗れば下宿に帰り着く。これに乗れば俺がひたすら微睡んでいた街とさよなら。これに乗れば……。

(ダ・メ・ダ！・！・！)

雷に打たれたとしてもかくやと思うほど、脳髓の焼けつくような衝撃に俺は一瞬硬直した。

(駄目ダ。マダ帰ッテハイケナイ。オ前ニハ忘レモノガアルダロウ)

切符は持ってる。大学の仲間にお土産も買った。来る時持ってきた荷物と来てからもらった荷物は全部カバンの中だ。何を忘れてるって言うんだ。

(繰り返スノカ。性懲リモナク)

繰り返す？ ……何を。

(ソウヤッテ自分ヲ守ルノカ。オ前ハ自分以外大事ジャナイノカ)

—そんなことない！！

視界の隅に特急の車両の先っぽを認識した。俺は荷物を掴み上げると、肩に担ぐのもとりあえず、改札へ駆け出した。

頭が覚えていなくても、脚が覚えていた。

高校生活最初の一年弱、何度も通った道だ。部活の帰り、そんなに頻繁ではなかったデートの帰り……俺にとってこの道はいつでも夜道だった。こうして、日のある時間に歩いてみると何だか変な気分がする。

昔のことだ。もう四年も前。

当然のことながら、景色がずいぶん変わっていた。前は空き地だった筈の場所がニュータウンになっている。徹底的に端正な家の並びようがあまりにもそこ以外の景観から浮いていて、妙に感心してしまう。ふと、戻ろうかな、と思った。だってこの変わりようでは。

(俺は無駄なことをしようとしてるのかな)

俺の目当ての場所に俺の目当てのものがあるかどうかなんて分かったものじゃない。今更何ができる？ いつも肝心な時に肝心なものを取り逃がす俺。取り逃がしてなお、それが肝心だったってことにすら気付かなかった……。

足が、止まった。行ってもいないかも知れない。いたとしたら、古傷をえぐるだけかも。振り返る。それでもいい。迷いを断ち切るようにかぶりを振った。もう戻りたくはない。

(無駄かどうかは、やってから決めるさ)

駅への道に背を向けて、脚が覚えている通りにまた歩き出した。こんなに街並みが変わっているのに迷わずに進んでいける自分にちょっと呆れた。執念だな、とぼんやり思う。二年前、実家から逃げ出して一人暮らしを始めた。脱出を果たしたつもりだったのに果たしてなかった。何ひとつ、終わっていないから、こうして今でも

—。

たどり着いたそこには、果たして、それがあった。

外観だけならばあまりにも見慣れた家だ。付き合っていた頃、俺が一方的にここに行くばかりだったっけ。彼女がうちに来たことは一度もなかった。連れてくるのがおっくうだったんだ。彼女と付き合っていることが知れた時の両親の渋い顔を見てしまえば自然と連れてくる気は失せた。かと言って、彼女の家に入り込む気も失せた。あちらこちらにやたらと挨拶して回るお母さんのことだから、俺がそこでもてなされてしまえば、渋い顔はとりあえず置いて過剰な「お返し」を考えることだろう。俺に降りかかるすべてが重苦しかった。でも、それは重苦しいと感じるほうが間違っているんだと思った。だから俺達の関係は彼女の家の玄関先までの関係だった。

深呼吸をひとつして、呼び鈴を押した。インターホンはあまり得意じゃない。必要以上に緊張してしまう。

—おそらく、インターホンじゃなくても、緊張するのだろうけど。

『はい、どちら様でしょう？』

どこか寝起きのような声が答えてきた。篠宮さんその人だ。頭の中が一瞬真っ白になる。

「……ごめん下さい」

何と名乗ればいいのかだろう。一言で言い表すにはあまりにも彼女は俺にとって複雑な存在だ。だからと言って、このままだんまりの訳にも行くまい……。

「中学の時に世話になった相沢と申しますけど、佐世子さんよろしいでしょうか」

『——』

はっきりと息を飲む音が聞こえた。続いて。

『え、ええええっ!?!』

こんな素っ頓狂な叫び声が飛んでくるとは思わなかったので、インターホンに近づけていた俺の耳はキーンと鳴った。ちょっとインターホンから離れて、篠宮さんの次の言葉を待つ。

『どっ……どうしたの相沢君、いきなり』

どうしたの相沢君いきなり。それは正直言って俺も訊きたかった。何と答えようかと散々迷った挙げ句、口から出てきたのは迷った甲斐がないほど短い一言だった。

「……忘れ物があったから」

『忘れ物？ ああー、あたし昨日酔っぱらってあの場に何か置いてっちゃったんだ？ ごめんね本当、見苦しかったでしょ、ああもう恥ずかしい……』

「いいや、そうじゃなくて、僕の方が」

『え、相沢君が？ うちに忘れ物？』

声のやり取りだけで説明できることでは到底なかった。

「……今、出て来れる？」

沈黙が流れた。大した時間でもなかったのかもしれないけど、インターホン越しでは充分不安に苛まれるぐらいの長さだと思う。無言は拒否のサインかな、とぼんやり考え始めた頃に篠宮さんはようやく答えた。

『——着替えてくるから、ちょっと待ってて』

ガチャッ、と無造作にホンを置く音がしたかと思うと、階段から転げ落ちたんじゃないかと思われるほどのすごい足音がここまで聞こえてきた。おとなしかった筈の篠宮さんが、ずいぶん変わったな、と思った。俺の記憶とあまりに違う。でも俺の記憶の中の篠宮さんはひょっとしたら彼女の半分ですらなかったのかも知れない。探り合うように始まった篠宮さんとの関係。そして終わる時まで探り合いだったっけ……。

数分して、足先が骨まで冷えてきた頃、篠宮さんは玄関のドアを開けて現れた。

「……おはよう」

この見せかけの何気なさがどこまで篠宮さんに通用してるかは分からない。とりあえず俺はできる限り何気なく篠宮さんを高校時代行きつけだった例の公園に誘導した。つい先日の朝彼女の家の水道管が凍りついて蛇口をひねっても水が出てこなかったとか、東京でも申し訳程度の初雪が降ったとか、そういう他愛のない話で笑いあっているうちに公園に着く。

「ここ、改装したんだよ。一年ぐらい前かな」

篠宮さんの言葉を聞きながらこの時何故か唐突に、ああ、気付いていたんだ、と思った。俺がどこに向かおうとしてるか分かっていて、何も言わずに付き合ってくれたのか。

「あのベンチ、おんぼろだったのも新しくなったんだ。崩れるかもしれないって心配しながら座らなくても良くなったのはいいんだけど、あそこに木があるでしょう、あれが桜なのね。春なんか大変よ、上から毛虫が落ちてくるから座れなくて」

昔から毛虫を親の敵みたいに嫌っていた篠宮さんは、そう言って、ことさらに大きい身震いをした。篠宮さんの冗舌は、そこで止まった。

「——会費のこと？ 足りなかったとか……」

「違うんだ、あのね」

篠宮さんはおそらく俺の言いたいことは正確には察してないかもしれないけどぼんやりしたイメージとして程度には把握しているんだと思う。それに怯えているんだと思う。……俺と同じように。

姿勢を正して、でもじっと彼女の目を見据えるには少し勇気が足りなくて、俺は木枯らしに吹かれてかすかに揺れるブランコを眺めた。そうこうしているうちにブランコが5回ぐらい揺れた。10回目と言おう。全く意味のない動機づけ。意気地のない俺の心はこんなものにすがりで

もしないと動かないから。決して言い訳なんかじゃない。結論を先延ばしにするための。

さあ、今だ—。

「……俺の勝手を許してくれるつもりがもしあるなら、これだけ言わせて下さい、—佐世子さん」

隣で息を飲む音が聞こえる。

「—雅貴君」

ブランコに少しだけ笑いかけて、俺は篠宮……佐世子さんに向き直った。ブランコに頼るのはここまで。後は俺自身がやることだ。佐世子さんは俺の名前を呼んだきり、無言だった。その無言に甘えることにした。無言は了解のサイン。そう、了解の……。

「君を手放したくなかったんだと思う、きっと、俺は」

「——!!」

ふたつの目が、思い切り叫んでいた。驚き？ 責め？ 憤り？ それとも—。こんなにもいるんなものが渦巻いて混沌とした目を俺は今まで見たことがなかった。視線の圧力に抗うように俺は言葉を続けた。

「どちらかが引っ込まなきゃ収まらないんなら、引っ込むのは自分でいいとあの時本気で思ってた。俺を選べって言って、ノーの返事が来るのを恐れてた。イエスである確証がないなら、俺は何も求めてない振りをしようと思った。傷を最大限に軽くするために。重大な決断を全部君任せにした」

ふたりの関係が続行するかどうかはまさにふたりの問題だった。そこから俺は手を引いた。俺が空回りするのは嫌だから。それが結果的に彼女を空回りさせてしまったということにも気付かずに。

(お前みたいな最低野郎も滅多にいないぜ)

—武藤が罵るのはまったく当たり前のことなんだ。

「……卑怯だったよね」

卑怯。そう、それこそが。

(俺の犯した、罪状—)

しかし、俺はそんな安っぽい自己憐憫に浸っていることを許されなかった。

「卑怯だったわ！」

そう叫んだ、佐世子さんの声はかすかに震えて、裏返った。

「何よ今更！ 遅いよ、もう……」

彼女が自分の肩をかい抱くと、搾り出されるように涙がその目から落ちた。痛ましいほどの泣き顔を隠しもせずにいる彼女から、俺は目も逸らせずに立ちすくむ。逸らさずに見つめ続けていることがせめてもの償いなんだろうか……。

涙に濡れた顔もあらわに肩を震わせている佐世子さんと、それにハンカチを貸すでもなくただじっと見つめているだけしか能のない俺と。どれだけの時間が経ったのか。あらゆるものの感覚が完全に麻痺していたけれど、とにかく佐世子さんのしゃくり上げる声が次第に収まりゆくぐらの時間が流れたことだけは、分かった。

今初めて思い当たったように、佐世子さんをごしごしと目の回りを手でぬぐった。

「雅貴君の勝手、聞いたわ。だからあたしの勝手も許して」

佐世子さんは俺が頷くより早く、右手を振りかざした。予想は、していた。

—左頬に、平手が飛んできた。

ぴしっと小さく響いた音を、悲鳴だと思った。あの時からおそらく誰にも……武藤にすらぶち

まけられないできたのだろう佐世子さんの。

空気の冷たさも手伝ってかすっかり赤くなった、俺の顔を打った自分の手を佐世子さんはじっと見つめていた。自分の手を見つめる佐世子さんのうつむいた顔を、俺はじっと見つめていた。その手を俺のコートのポケットで温めてあげることがもはやできないんだなと思いながら。

はあっ、と手に白い息を吹きかけてから、佐世子さんはポケットの中から何やら取り出して揉み始めた。カイロだった。

「……おなかにも入ってるのよ、これ」

ようやく顔を上げた佐世子さんはかすかに笑っていたように見えた。

「……ねえ、雅貴君」

「何？」

「過去形、なんだね」

佐世子さんの言葉は非難ではなくて確認だった。

(手放したく、なかった)

「……君もだろ？」

(卑怯、だったわ)

「ま、ね。でもかなり古傷えぐった感じ」

「……実は俺も」

俺がこれを言うのは反則かな、とちょっと思った。佐世子さんは笑ったままの顔で軽く俺を睨んだ。

「いいの雅貴君は自業自得なんだから」

「はい、すみません」

顔を見合わせて、俺達は笑った。見つけた、と思った。よりを戻すのではない、振り出しに戻るのでもない、別れたという事実の痕に築くべき、新しいスタンス。

「一人を殴るって、痛いね」

唐突に佐世子さんは言った。俺に言っているようでも、独り言のようでもある口調。

「でもありがとう、すっきりしたわ。これを弾みにあたし、昭道君と1発やらかしてこようと思う」

「うん？」

「冷戦状態って言ったけど、実はあたしが一方的に口聞いてない状態なの、今。おそらく昭道君はあたしが何で喋らないかすら分かってないんじゃないかな」

確かに、と思う。武藤ははっきり言って繊細なタイプじゃない。佐世子さんが言わないことを先回りして察してるとは考えにくい。一体彼女は、武藤にも打ち明けられないほどの何を抱え込んでいるのか。知りたくないと言ったら嘘になる。けれどそれこそ、俺が詮索する義理はないことだ。

「それじゃいけないと思うの。……だからね、今度彼と精一杯大喧嘩してやるわ」

そう言って、ガッツポーズまで作って見せる。

「—それがいいと思うよ」

本当に俺は思った。そうするのがいいと。

「君と武藤なら、間違いなく君を応援するから」

「本当？ よかった、もしこれで昭道君を応援するとか言い出したらあたし、もう1回君のこ」と殴ってやろうかと思ったわ」

「そ、それだけは勘弁して下さい」

俺はわざとおどけたように、顔の前に両手をかざして見せる。雪をはらんだ白い空に、佐世子さんの笑い声が響いた――。

-chapter 7-

あまりに何気なく、生活は日常を取り戻した。

俺は身の振り方を決めかねていた。香から手を引け—そんなこと言われても、と思わずにいられない。武藤に言われたからといってどうなることでもない。だからと言ってどうやって確かめろというんだ、香さんの意思など！

(あのさ、香さん、僕と別れたいと思う？)

.....冗談じゃなかった。こんなこと、面と向かって訊ける訳がない。

(分かった、ごめん。香さんと上手くやれよ)

あの時そう言いはしたものの、そんなことを俺と武藤の間だけで決めてしまっていていいものか。

武藤は香さんを好きなのだろうか。そうだとすると、もし香さんも武藤のことが好きなのだとしたら.....俺に出る幕なんか無い。馬に蹴られて死んでしまえ、だ。いや、武藤の気持ちがどうあれ、香さんがもし俺じゃない人を思っているのなら、もう話にならない。結局は彼女の気持ち次第だ。だけどそれを確かめることはどうやら至難の業だ。

いいじゃないか、今のままで。俺が別れたいと思っていない以上、香さんと別れなければならない理由は今のところないぞ。そんな開き直りのような結論を無理矢理導いた頃、ちょうど連休は終わりを告げた。

今日はニコマが一緒だったのでそのまま香さんと学食へ向かった。毎週のことだ。それでも、センターの準備期間やら成人の日やらその振替やらでさんざん休みになった後だし、だいたい俺は帰省してたのでずいぶん久しぶりではある。感覚としては。

香さんはいつもの通り、そのまま渋谷センター街を歩いてても違和感なさすぎな格好でお出ましである。今日はこの冬一番の冷え込みだと言っていたけど、フェイクファーのコートにミニスカート、ショートブーツで頑張っている。男の俺から見れば、寒々しいことこの上ない。

「女の方はあんまり足腰冷やさないほうがいいと思うよ」

「そうよねえ、いざって時に困るもんねえ」

からからと笑っている。.....な、何もそこまで丁寧に納得しなくても。

「雅貴の成人を祝って、乾杯！」

セルフサービスのお茶の器を掲げて、香さんは言った。こつん、とプラスチックの触れ合う音。

「これでキミもオジサンの第一歩だね」

「そう言うアナタはオバサンの第二歩ですか」

「あ、二十一でオバイチなんだって、女の場合。で、二十二でオバニで、二十三でオバサンで...
...そうすると、二十九はオバキューになるんだよねー」

「わー.....」

同じように考えると、男の二十九はオジキューになるのか。これはあまり面白くないな、と思った。

お茶はまだ熱くて、「乾杯」はできそうになかった。ので、一口含む。ある程度お盆の上を片付け終わるまで無言だった。何も言わずに黙々と食べる。不味くはないけど、じっくり味わって食べるほど美味くもないのがうちの学食だ。

「で、どうだった？ 久々の帰省の感想は？」

もぐつかせた口を手で押さえながら香さんが訊く。飲み込んでから喋りなっているのになあ。まあいいけど。

「どうって言っても……」

武藤に殴られて佐世子さんと喋ってきた。最初に浮かんだこの答えは即座に却下した。あまり気軽に口にできる話じゃない。

「変わった奴もいたし変わってないのもいたけど、やっぱり懐かしかったよ」

「……いまいち感動薄いね。親御さんとかはどうだったのよ。あんたずいぶん帰ってなかったから、喜んだんじゃないの？」

過剰歓迎してくれたお母さんと、出がけに見たお父さんの渋い顔が同時に浮かぶ。……微妙なところだ。あ、でも清貴は。

「うん、まあね」

「中坊のクラス会ってやっぱりあった訳？」

「あったよ、もう夕方頃から早々と。でもメンバーが中学校の仲間なのに行った場所が飲み屋だったから、ちょっと変な気分だったけど」

「……雅貴、あんたもしかして飲みにも行きませんか、買い食いもしませんかなんて真面目な中学生やってたとか

あ？」

「やってました、すみません」

あらら一、とか何とか呟いている。僕は香さんと違ってヒンコウハウセイでしたから、と言うと、香さんは裏拳で俺の腕をはたいてきた。

カオリさんはフォークを持つ手を一瞬止めたようだった。かと思うと、すぐにそのままケーキに直行して、一口サイズに切り分けて口に運ぶ。その一連の行動が、どこかぎこちなく見えた。

「あ、ところで、昭道とは何かあった？」

……………。

「こないだあたし変な伝言伝えたじゃん。あれどうなったのかなって」

(人の従姉に余計なちょっかい出すな)

人の彼女に余計なちょっかい出すな、とは言い返せなかったんだ、あの時。苦々しい後味ばかりが残る、武藤との会話。

いつの頃からそんなことになってしまったのか。

「まあ……つつがないって言えばつつがなかったよ」

大後悔。これじゃ話が續かない。彼女の気持ちを確かめる、チャンスだったかもしれないのに。

「つつがない？ じゃあいいんだけどさ。あたし思わず心配しちゃったよ、あいつかなりやばいから」

「やばい？ 何が？」

まあ確かに相当喧嘩っ早いところはあるけど。

「えーと、それについては、つまりタイム・イズ・ライブだねってことなんだけど……」

そう言って、香さんはきょろきょろ周りを見渡した。ああここじゃやばいかな、などと呟いているのは。

「雅貴、外行こう。すぐこれ食べちゃうから、待ってて」

ケーキの残り五分の一ほどを一口で片付けて、香さんは立ち上がった。俺はただついて行くしかなかった。言いたいことは多少予想がついた。だけどそれを聞かない勇気も、俺にはなか

った。

タイム・イズ・ライブ。

「単刀直入に言うとね、あたしかなりあんたに嫉妬してんの」

開口一番、香さんはこんなことを言った。

「僕に？」

「そう。昭道が行っちゃってるせいで、あたし男に嫉妬する羽目になってるんだよ。ひどいと思わない？」

どこかで聞いた台詞だ、と思った。……佐世子さんだ。では篠宮さんももしかして俺に嫉妬してたのだろうか。武藤の彼女だった佐世子さんが、その前の彼氏だった俺に？ 変な話だ。

「あたし、もともと昭道が好きだったのよ。従弟なのにね。ちょっときわどいのは分かってるから、こんなこと言えないじゃない？ そしたら、こっちが黙ってるのをいいことに、あいつ口を開けば雅貴のことばかり。憎々しげに言っちゃいるけど、あいつ、相当あんたのこと気に入ってるよ」

「……待って」

思わず、口を挟まずにいられなかった。ということは、どういうことなんだろうか。つまり…武藤は？ 冗談だろう、と思った。でもそう考えれば割と辻褃の合うことが多い気がする。

(誰一人、お前にとっての特別にはなれないんだ)

(お前にとっての特別には)

(なれないんだ)！

ちょっと待ってくれよ。全ては俺の決断に委ねられてるとでも言いたいのか。俺に何をそんなに望むんだ。こんなつまらない馬鹿な人間に、そんなにたくさん期待をかけてくれたって困るんだ。やめてくれ。俺にはどうすることもできない。何ひとつ満足に伝えてあげられない。

—今更どうにもならない。

「でね、あたしはかなり悔しかったので、昭道をぎゃふんと言わせてやることにした訳よ。ちょうど同じ学部にあんたはいた。相沢雅貴ってのが何者だか知らないけど、とりあえず手に入れてやろうって。そうすればあいつを悔しがらせてやることのできるって」

だって武藤は男だから。武藤の気持ちには答えてやれないという生まれつきの必然。

「つまり、あたし、あんたをダシに使ったのよ。将を射んとせばまず駒を射よ、って言うでしょ。あんたを手に入れたあたしに、あいつが嫉妬してくれれば良かったの。そこからは自分で何とかするしかないしさ」

武藤が一人の人間として好きかどうかとはまったく別の次元でとにかく問答無用で武藤の気持ちには答えてやれない。でもこれは俺の側の勝手な理屈でしかなくて。同じように、やっぱり武藤が俺にぶつけてくる気持ちは勝手かつ暴力的な感情でしかなくて。

「馬鹿なのよ、あたしも昭道もおんなじことしてさあ。変なとこでそっくり。ひどい奴でしょ、あたし？ 呆れたでしょ」

ずるい、と思った。こっちより先にさっさと投げやりになるなんてずるい。香さんは最初から俺のことなど眼中になかった。じゃあ俺は？ そうだ、香さんに付き合ってくれと言われたから。でも今は？ 今、俺は香さんを好きだろうか。

どう言えばいいのだろうか、この気持ちを。ただ香さんの世話の焼けるところがたまらなく気になって、それでその気になるということが俺にとっては不可欠な要素なんだ。香さんの世話を俺の他に誰が焼いてあげられる？ そんな自信過剰な独占欲を何と表現すれば？

でももうどうしようもない。香さんの気持ちが俺になかったということが分かった以上、俺の勝手な独占欲を押し付けることはできないじゃないか。

(ソレガオ前ノ本音ナノカ?)

.....そうだ。

(本当ニ、ソウナノカ?)

.....だったらどうだと言うんだ。

(繰り返スノカ。性懲リモナク)

繰り返す?何を。

(ソウヤッテ自分ヲ守ルノカ。オ前ハ自分以外大事ジャナイノカ)

自分より香さんの感情が大事だから諦めようとしてるんじゃないか。自分の感情を押し付けて香さんを困らせたくない。香さんは俺ではなくて武藤が好きで、だから俺には引っ込んで欲しい筈だ。それなのにここで俺がまるでストーカーのように言い募ってどうする。俺がいくら言い募ったところで、香さんは俺になびいてくれやしないだろう。どっちにしたって俺は拒否されるんだ!

—俺は、拒否されるのだけは、ごめんだ。

(ホラ、ソレガ繰り返シダト言ウンダ)

はっとした。自分の勝手さに。

俺を取り囲むどんな人間からも拒否されたくないという傲慢なまでの勝手さに。そのためにあらゆる決断を回避して相手の意向に沿ってみせ、しかもそれを「期待には応えなければならないから」と言い訳して責任を相手に着せ、自分を美化する狡猾さに。

言い訳だったんだ。全部。俺のこれまでの人生すべてが!

期待に応えるためなんてのはただの方便。俺はノーと言われることを—俺という存在を拒絶されることを恐れて、「何でもするから俺を見捨てないで!」と皆にすがりついている憶病者だったんだ。

そうやって、結局大事なもの全て踏みにじってきたんだ。佐世子さんの気持ちや武藤の気持ち.....それらを全部空回りさせ続けて、そのことにすら俺 自信は気付かずにきた。それが俺の高校時代。

もう戻りたくはない。

「.....何が言いたい、香さん」

体中の自律神経全部この口に預けよう。大脳を経由しない言葉を吐き出してしまえ。今こそ。「今どうしてそんなことを言うんだ。怨みを買うためか? それを聞けば俺が君から離れていくとも思ったのか? だったら俺は今の言葉を聞かなかったことにする」

俺は今世界中で一番勝手な男かも知れない。それでもいい。

好きだという気持ち、それ自体がエゴなのだから。それでいいし、それこそが全てなのだというのを、俺は知ったから。

佐世子さんにこの間やっと言えた言葉。香さんにも言える筈。

今度こそ、時を誤らずに。

(君を手放したくなかったんだと思う、きっと、俺は)

過去形など使わなくてすむように。

「香さん、俺は、君を——」

(.....待ッテタ。ソノ言葉)

そう紡いだ彼女の唇が急速に至近距離に近付き、触れ、離れた。

体中の力が抜けて、俺はその場にへたり込んだ。仰ぎ見ると、呆れるほど澄み渡った空に煙草の煙にも似た白い息が立ちのぼり、かき消えた。

(fin.)

お読みいただきありがとうございました。

よろしかったら、[こちら](#)からコメントをどうぞ！ (パプーのコメントフォームに飛びます)

あとがき（2004年7月当時）

今回この作品ページを全面改装するにあたり、出来心で本文を読み返してみましたところ、床を転げ回りたいほどの恥ずかしさに駆られてしまいまして、「……封印だ、封印！ このまま闇に葬り去っても、おそらく誰も気づかぬ一だろ！」という衝動を抑え込むのに一苦労でした。

思い返せば、この作品を書き上げたのはもう6年も前のことになるんですね。その後、サイト立ち上げ当初、何かひとつぐらいまとまった長さの小説を載せる必要があったことから、大々的に改稿してアップし、それ以降たいして宣伝もせずに放置したまま今に至っております。

一見淡泊ではありますが、当サイト【AQUAPOLIS】の歩みと軌跡をともにしてきた熱いやつです。

若書きの、赤面ものの作品ですが、それゆえに愛着もひとしおです。

2004年7月17日。このたび【[番外編競作第二弾 禁じられた言葉](#)】という企画に作品を提出します。それが『[ゼブラストライプの上で 喘ぐ指先](#)』というやつなのですが、この短編の本編がどう考えても『EXODUS』であるため、番外編競作ページづてでいらしたお客様にアピールできる作品ページを、と考へ、今回の改装となったのでした。

とはいえ、『EXODUS』自体がそもそも、『[Noisy Lifeシリーズ](#)』という一連の作品群のサイドストーリーにあたります。肝心の『Noisy Life』本編が何ひとつアップされていないという有様ですが、ちまちまと短編でつなぎつつ、いつか必ず本編をひっさげてまいりますのでお楽しみに(^_^) 気に入っている物語群なだけに、助走が長いのです、申し訳ありません。

本編をお楽しみいただけただとして（って、気が早いですが；）、その後であらためて「もう一度読もうかな」と思わせる力、相沢雅貴という優秀だけど果てしなく不器用なひとりの青年の、人生のかけらを、この『EXODUS』は孕んでいるだろうか。

読者さまにもしそう思っていただけなら、作者冥利です。

ちなみに、この下にあるのは、『EXODUS』初回アップ時のあとがきです。

この文章もだいぶ若くて青いですが(^o^A 記念碑だと思ふことにしてこのまま載せておきます

。

……こげなウザイ男の話をどうも皆様お疲れさまでした<(_)>

コイツは私が大学時代に書き上げた、まとまった長さを持つ小説の中では初めての「完結させた作品」ということになります。

（ちなみに現在、卒業して3年が経とうとしてますが、仕上がってる作品は納得の行っていないのも含めこれの他はあと1作だけです。何やっとなじゃオノレエ！）

だもんで、これは私の中ではかなりデカイ意味を持つ作品なのでした。

これを仕上げた当時の私は、これを引っ提げて「コバルト・ノベル大賞からジュニア小説界へ颯爽とデビュー！（きらりん★）」の予定でした。…… 予定は未定にして決定にあらず。と言うか、選考委員の方々と意見が合わず、と言うかただ単に私の実力不足で（←これが一番正解）

私の野望は水の泡と化しました(T_T)

これをホームページにアップするに当たって、ごくごく一部の方はお分かりかと思いますがかなり重大な部分を削除/加筆修正しております。

ノベル大賞の二次選考でハネられた作品を、いくら思い入れが強いとは言えそのまま乗せるのはいくら何でも手抜きだろうと思ったもので。書いてから1, 2年は客観的に評価できませんでしたが、最近ようやく落ち着いた目で見られるようになったので、「今のオイラならこう書くぞ」というように書いてみました。

書き終わった今、何故あの作品が落ちたか分かった気がします...(^_^)

(でもなー。こうやって直し入れたものを送っても通るかどうかは謎だよなー...だからもう一度投稿するの、ちょっと恐かったりして)

—とは言え、私的には実は一番最初に書いたバージョン（つまり、落とされたやつ）も結構気に入ってたりするんです。

もし興味をお持ちの方はご一報ください。お声が多かった場合、「もうひとつのEXODUS」としてアップしようかなーと試してみたりみなかったり。

(どのぐらいのお声があれば「多い」ということになるのか基準はかなり行き当たりばったり...わはははは)

とりあえず、ホントーっくにネガティブな話だということは、先に明記しておきます。ウザさは今回お読みになったものの比ではありません。何じゃこのクソ男、俺に3年打たれて根性入れ直せえや！！ぐらいは思うかも（これでも甘い？）それでもよろしければ、どうぞv

そんでは、能書きもこの辺りでお終いに...

お読みいただきありがとうございました。

よろしかったら、[こちら](#)からコメントをどうぞ！（パプーのコメントフォームに飛びます）